# 第8章

# 住民の洪水ハザードマップの活用実態

**8-1　洪水ハザードマップとは**

**8-2　洪水ハザードマップの利用実態**

**8-3　住民の避難行動における洪水ハザードマップの効果**

ここでは、今回の洪水を通じての住民の郡山市洪水ハザードマップの活用実態について把握する。8-2では今回の洪水時における郡山市洪水ハザードマップの利用状況とそこでの有効性評価について検討し、8-3では、今回の洪水時における住民の避難行動に対する郡山市洪水ハザードマップの効果を検討する。

調査項目は、以下のとおりになっている。調査項目の詳細は付録を参照されたい。

| | |
|---|---|
| 問16 | 今回の洪水における郡山市洪水ハザードマップの利用状況 |
| 問17 | 今回の洪水における郡山市洪水ハザードマップの有効性評価 |
| 問19 | 郡山市洪水ハザードマップの内容評価 |

## ８－１　洪水ハザードマップとは

洪水ハザードマップは、大規模な洪水が発生した場合に、住民が安全に避難行動を行えるよう、予想される浸水の深さや避難場所、避難経路などを示した地図である。平成６年に建設省河川局の通達によって作成が始まり、平成１０年９月末現在では、３８の市町村で作成され住民に公表されている。また、今回の郡山での洪水や高知の水害を踏まえ、建設省では洪水ハザードマップの作成を各地方自治体に強く指導することとしている。

戦後、我が国では治水整備が積極的に進められた。その結果、水害の発災頻度は著しく低下した。しかし、治水整備は通常、数十年に一度、百年、百五十年に一度発生する可能性がある豪雨に対応して行われており、それを越える超過洪水は、長い期間を考えれば必ず発生すると言ってよい。治水整備をさらに押し進め、水害そのものを減らすことは重要なことではあるが、公共事業費を際限なく拡大することは無理であることを考えると、超過洪水に対する対応は、住民個人の対応行動や街づくりのなかでの取り組みなど、ソフトな対応に依らざるを得ないのが現実である。洪水ハザードマップは、洪水に対する正しい知識や洪水に際して取るべき行動を、住民に事前に学習してもらうことで、円滑な避難行動を誘導しようとする試みであり、その効果が注目されるところとなっている。

## ８－２　洪水ハザードマップの利用実態

***point***
- **洪水ハザードマップは配布されているが、その存在を認識していない住民が1/３を占める。**
- **洪水ハザードマップを持っている住民の半数以上は、今回の洪水で役に立ったと評価している。**
- **若年層や洪水に対する意識が低い住民においては、洪水ハザードマップが受容されにくい。**

### （１）今回の洪水における洪水ハザードマップの利用と評価

・今回、調査対象となった全世帯には、ハザードマップが配布されている。このうち、約30%の住民は、今回の洪水で「あらためて郡山市洪水ハザードマップを見た」としており、今回の洪水に際して何らかの利用をしていることがわかる。しかし、32.8%の住民はハザードマップを持っていないとしており、配布後捨ててしまったり、紛失してしまったりしている。また、37.7%の住民は、「あらためて見ることはなかった」と回答している。

・洪水ハザードマップを持っている住民のハザードマップに対する評価は、今回の洪水に際して役に立たなかったとする住民が44%、役に立ったとする住民は56%となり半数を超えている。

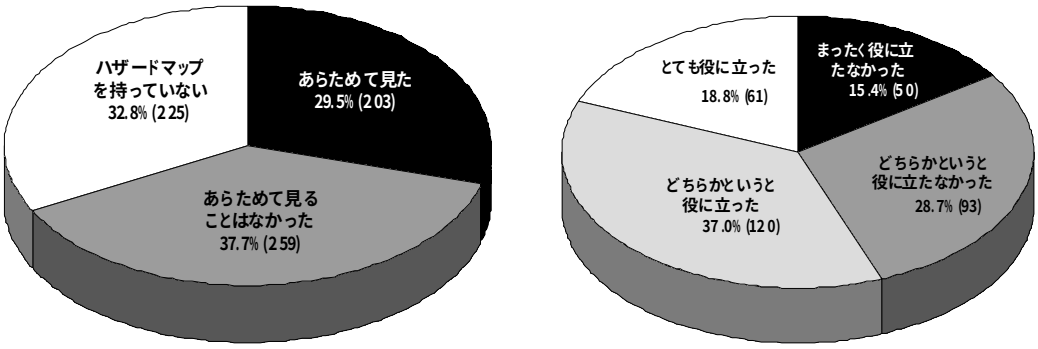


**図８－１　今回の洪水における住民の洪水ハザードマップの利用と評価**

・役に立ったハザードマップの内容については、「避難場所の位置」や「過去の洪水の記録」が最も多く、続いて「持ち出し品」、「避難命令発令時の行動の仕方」などとなっている。「避難場所の位置」に関しては、役に立たなかった内容としても多く挙げられており、住民の関心の高さが伺える。

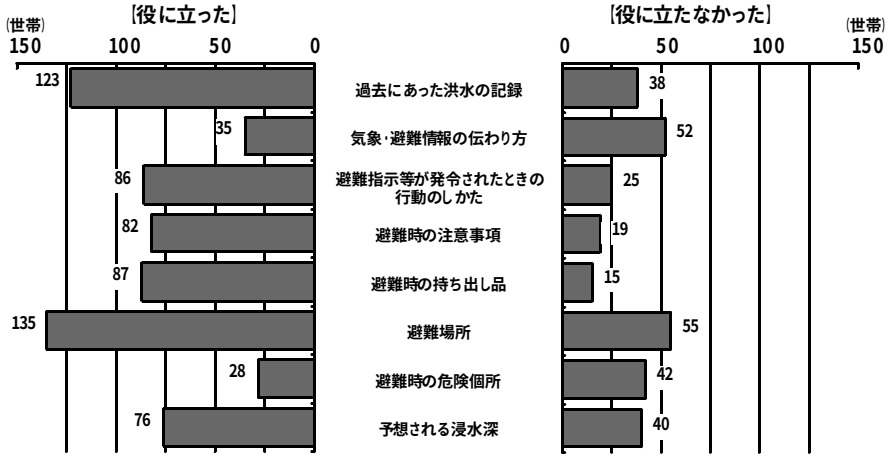


**図８－２　今回の洪水における住民の洪水ハザードマップの内容評価**

## （２）住民の洪水ハザードマップの受容実態

今回の洪水における住民の洪水ハザードマップの利用状況と有効性評価の回答を基に、住民の洪水ハザードマップの受容実態について、住民を以下のように３つに分類して把握する。

【見た】；「これまでに洪水ハザードマップを見たことのある住民」
　問16の今回の水害における住民の洪水ハザードマップの利用状況について、「見た」と回答した住民。あるいは、問17の今回の水害における住民の洪水ハザードマップの有効性評価について、何らかの評価を下している住民。

【見ていない】；「洪水ハザードマップは持っているがこれまでに見たことがない住民」
　問17の今回の水害における住民の洪水ハザードマップの有効性評価について、「配られたが一度も見ていない」と回答した住民。

【持っていない】；「洪水ハザードマップを見たこともなければ持ってもいない」
　問16の今回の水害における住民の洪水ハザードマップの利用状況について、「持っていない」と回答した住民。あるいは、問17の今回の水害における住民の洪水ハザードマップの有効性評価について、「持っていない」と回答している住民。

・以上のような分類により、住民の洪水ハザードマップの受容状況を示したものが図８－３である。これによると、全体の48.9%の住民が「見た」、16.9%が「見ない」、34.2%が「持っていない」といった構成となった。

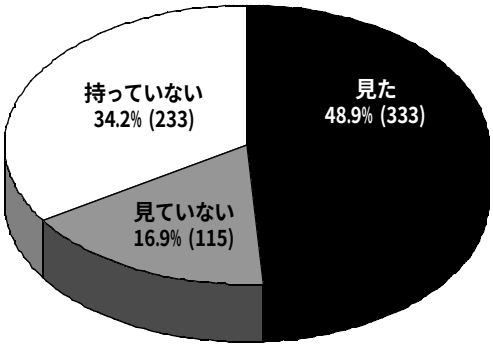


**図８－３　住民の洪水ハザードマップの受容**

【住民の洪水ハザードマップの受容実態の構成】

・次項に、住民の洪水ハザードマップの受容実態を、地域別、生年別、洪水に対する意識別に表した図を示す。
・地域ごとに住民の洪水ハザードマップの受容の実態は若干異なっている。
・住民の洪水ハザードマップの受容実態と生年との関係では、「昭和元年～10年」生まれの層で最も多くの割合で洪水ハザードマップが見られているが、若年層になるにつれて、「持っていない」世帯の割合が増加している。
・洪水に対する意識との関係では、洪水の発生に対して高い意識をもつ住民層において多くの割合で洪水ハザードマップが受容されている様子がわかる。

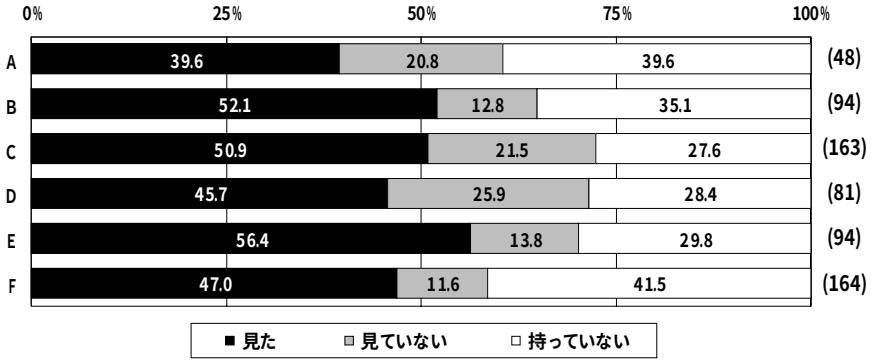


**図８－４　地域ブロック別に見た住民の洪水ハザードマップの受容実態**

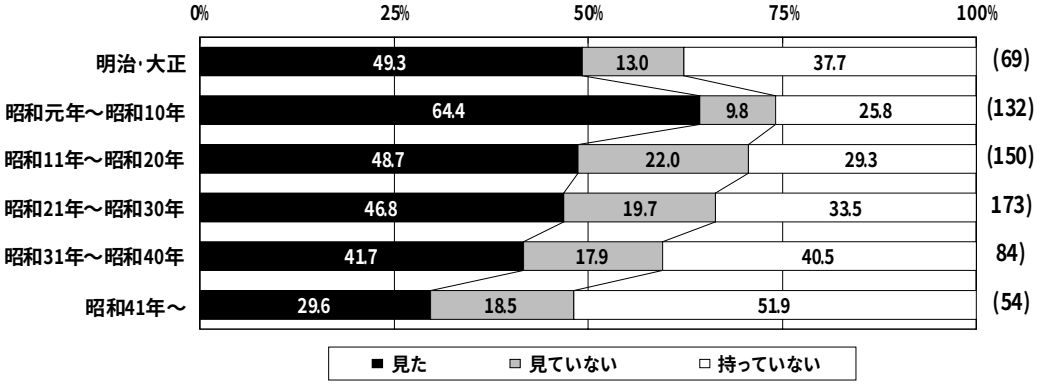


**図８－５　住民の洪水ハザードマップの受容実態と生年との関係**

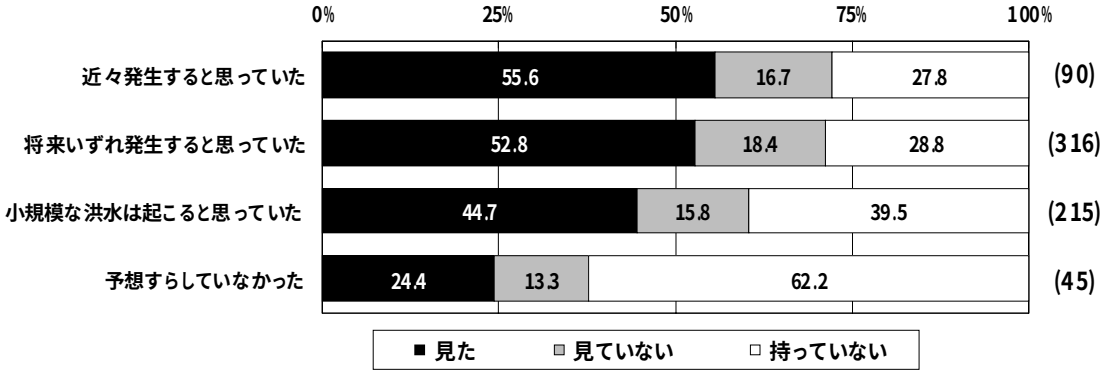


**図８－６　住民の洪水に対する意識と洪水ハザードマップの受容実態との関係**

**「洪水ハザードマップ」に関する問題点・課題**

・洪水ハザードマップの存在とその意図するところを、地域住民に周知徹底する必要がある。
・避難所の指定については「遠い」との意見や、自宅に一番近い避難所が指定されず、遠くの避難所が指定されていることに対する不満も聞かれた。洪水ハザードマップに示される避難場所の指定は、住民全体の避難行動を考えて計画されているため、場所によっては自宅に一番近い避難所が指定されないこともある。また、今回実際に指示された避難所と洪水ハザードマップの避難所とが異なるケースも多々見られた。今回の洪水の経験に基づいて、改めて避難所の場所指定のあり方を考えることが必要である。

**洪水ハザードマップに関する意見**

～ Free Answer より抜粋 ～

・ハザードマップに示される避難場所と実際に指示された避難場所が一致してない。
・ハザードマップでは避難所が「安積一小」になっていたので、準備していると、そうではなかったようである（「日大」らしい）。あてにならず困った。
・ハザードマップを最初にみたとき、これはとんでもないところへ家を建てたと思ったが、万が一あるかもしれないという覚悟ができて今回に至った。覚悟があるとないとでは大違いでした。
・洪水ハザードマップについて、指定されている避難所は遠すぎるし、途中の道は低くなっていて、荷物や子供を連れて行く気は全くありません。
・ハザードマップの指定避難所は近いので良いと思う。
・ハザードマップは避難するときに参考になった。
・洪水ハザードマップの予想浸水深を見て、雨が降るたびに心配になりました。
・洪水ハザードマップの指定避難所について、老夫婦だけのところが近くにいますが、避難所が遠すぎていけない、といっていた。
・洪水ハザードマップが配られていたのに、見なかったのが残念。
・ハザードマップ指定避難所は、住民の意思とはかけ離れた場所である。

etc.

## ８－３　住民の避難行動における洪水ハザードマップの効果

**point** ・洪水ハザードマップは、避難勧告・指示発令時における住民の速やかな避難行動を促進する。

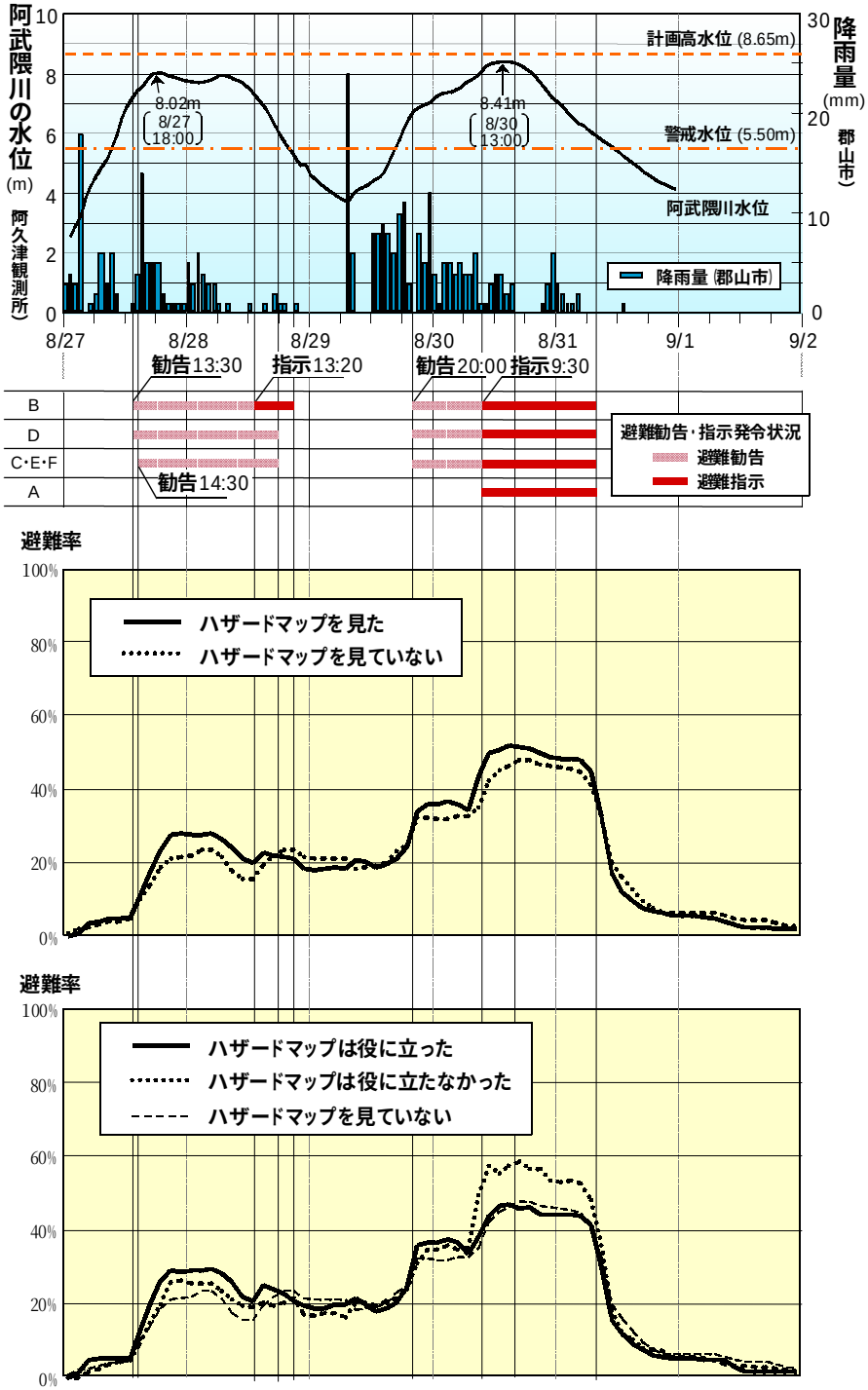


図８－７　住民の避難率にみる洪水ハザードマップの効果

・まず、図８－７において、住民の避難率における洪水ハザードマップの効果を見てみると、洪水ハザードマップを見た住民は、見ていない住民に比べて、避難勧告や避難指示が発令されると、それに従って避難を行う人が多く、また、これらの人たちは、避難命令が解除されると家に帰る人も多く、行政からの避難情報に従う傾向が顕著に認められる。このような、避難勧告・指示の発令期間における洪水ハザードマップの効果は、多いところで約10%の避難率の差として現れており、これを実際に避難勧告・指示が発令された11,148世帯に換算すると、約1,114世帯の避難行動を促したと予想される結果となっている。

・また、図８－８において、住民の避難開始タイミングにおける洪水ハザードマップの効果を見てみる。図は、住民の避難開始タイミングの分布を８月30日の部分について拡大して示したものである。これによると、洪水ハザードマップを見た住民の避難開始タイミングは、避難指示の発令(切替)のあった9:30と同時期にピークとなっており、見なかった住民より１時間ほど遅くなっていることが確認できる。このように、住民の避難行動において洪水ハザードマップは、より多くの避難行動を促進するように作用するだけでなく、避難開始のタイミングをも早めるよう作用していることがわかる。

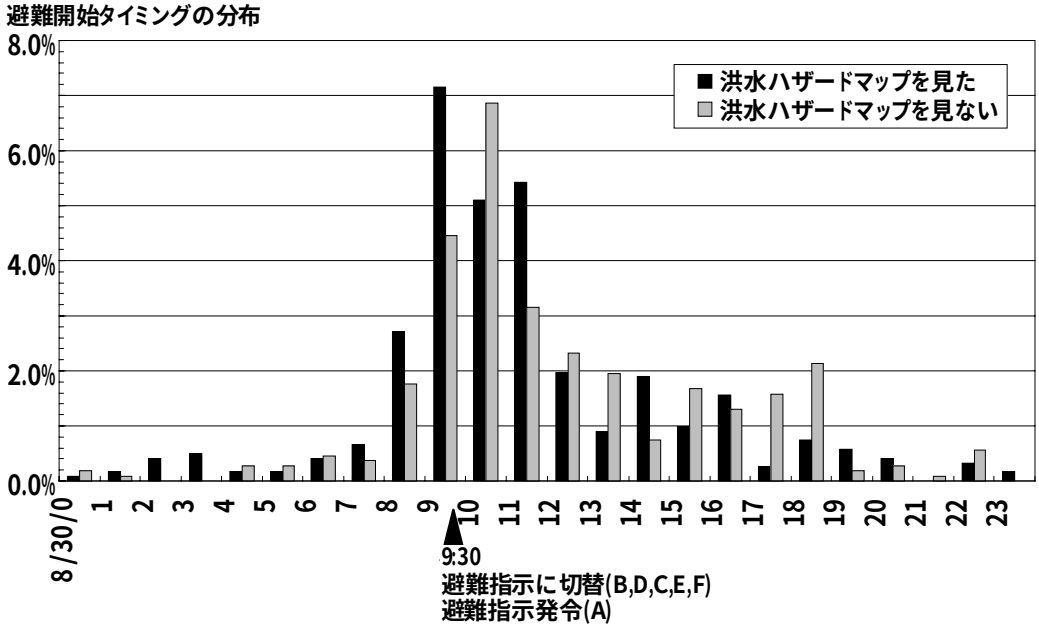


**図８－８　住民の避難開始タイミングにみる洪水ハザードマップの効果**